

第2回 日本の学校と学校心理学

○海外における学校心理学

- ・アメリカのスクールサイコロジスト

：多様な専門家による協働的な援助を基礎として、校長，担任，保護者とのコンサルテーション，子どものカウンセリング，授業場面の観察，個別式知能検査の実施，IEP（個別教育計画）会議への出席，予防教育の実施などを行う。主に，最新の研究成果に基づいて，学習面でつまづく子どもの認知特性を把握し，その適応に向けて学校全体のカリキュラムから個別の援助計画までを見渡しなが実践を行い，また実践の効果検証を行っている。

- ・イギリスのエデュケーションサイコロジスト

：特別支援教育におけるアセスメントも含め，子ども，保護者，教師の相談に乗りつつ，学校全体の支援者としての活動を行う。具体的には，学校教育の方針作成，学校で行われるプログラムの教育評価，各種プロジェクトの実施などであり，国の教育政策や法に基づいた学校教育の実施にあたり，学校全体の支援者として位置付けられている。

○日本における学校心理学

- ・歴史的経緯

| | | |
|--------------------------------|---------------------|--|
| 戦後～1970年代半ば | （貧困関連）少年犯罪 | 個性尊重の民主主義教育を目指す →カウンセリングに注目が集まる |
| 高度経済成長期（1970年代半ば） ～1990年代半ば | 校内暴力 →いじめ・不登校の出現 | 個性よりも「管理教育」へ →それは失敗だったのでは？ →カウンセリングマインドの蔓延 |
| 1990年代半ば以降 | キレル少年 | もはや教師だけでは対応できない →スクールカウンセラー活用事業の導入 |
| | 発達障害 | もはや従来の集団指導だけで対応できない →特別支援教育の導入 |

- ・日本の学校における子ども支援の特徴

：1人の教師が，子どもの学習面から生活面まで総合的に見るという学級担任制という方法や，給食，掃除，部活動，学校行事などの様々な授業外活動を通して協調性や連帯感を育てるという方法は，日本の学校文化と言えるものである。このような日本の学校になじむ形の「子ども支援」とはいかにあるべきか，を探る必要がある。